

ベースボール型体育授業における「主体性」の育成を意図した実証研究

— 『学び合い』に基づく守備場面の活動に着目して —

柿手 祝彦 ・ 濱本 想子 ・ 岩田 昌太郎*

1. 研究の背景

今日、グローバル化、情報化、少子・高齢化が急速に進展する中で、社会構造の変化に伴い、我々のライフスタイルも変化していくことが予想される。今後、我々のライフスタイルを鑑みたとき、文化としての運動・スポーツをより主体的に享受する重要性が高まっていくであろう。このような情勢の中、これまで以上に、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うことが保健体育科の授業に求められる。

ところで、東雲小学校・中学校では、一昨年度より、「『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造」を研究テーマと設定して実践研究を始めた。本研究における「グローバル時代をきりひらく資質・能力」とは、「主体性(自律的な活動・チャレンジ精神)」、「多様性(さまざまな文化に対する受容)」、「協働性(コラボレーション)」の3つである。体育科・保健体育科における「主体性」は課題に向かって進んで取り組む姿、「多様性」は他者の意見や考えを受容し違いを認める姿、そして「協働性」は他者との対話や意見交換を通して課題解決に向かう姿とした。また、「主体性」、「多様性」、「協働性」を発揮しながら学習課題の解決に向けて取り組んでいる子どもの様子を「学びを豊かにしている状態」と捉えることにした。なお、本研究では、この3つの要素のうち「主体性」の育成に着目することとした。それでは、一体、どのように体育科の中で「主体性」に着目するのか。

生涯スポーツを考えると、ベースボール型ゲームは楽しさや人気の面から見て、日本人に馴染み深いスポーツといえる(立木, 2011)。特に、広島県では、広島東洋カープのリーグ2連覇やカープ女子など、ベースボール型ゲームが生活の中に溶け込んでいる傾向が窺える。しかし、ベースボール型の体育授業は、ルールが複雑で高度な技能が要求され、男女差や運動量、施設や設備等の問題といった多くの課題も散在する(岩田, 2017)。しかも、なかなか全員の子どもの楽しさを味わい、深めることが難しい現況にある。このような現況に対して、岩田(2011)は「守備で進塁を阻止する役割行動や技能的発展の視点から子どもたちの主体性を促進すれば、ベースボール型ゲームの楽しさを獲得できる」と指摘している。また、同様な指摘や報告(例えば、竹内・岩田, 2006; 南島, 2010)もあり、生徒たちの「課題に向かって進んで取り組む姿」の育成には適した種目といえるであろう。

一方、このような「主体性」の育成に関して、西川(2010)が提唱する『学び合い』がある。西川(2014)は、『学び合い』について、「一言で言うと、一人も見捨てないということを毎日の教科学習の時間に求め続ける授業」と提言している。また、三崎(2010)は『学び合い』は考え方(文化)なので、学習者観、授業観、学校観の3つの考え方を教師が持ってそれを子どもたちに伝えることによって、子どもたちがその考え方を享受することができれば、『学び合い』の現象は自然に現れる」と述べている。さらに、三崎(2010)は『学び合い』は、この3つの考え方を学習者全員が享受することによって、学習者が自由に相互に聞き合ったり教え合ったりして情報交換しながら目標を達成する現象であると述べている。つまり、『学び合い』では、教師と子どもがともに『学び合い』で大切にされている考え方を共有していくことが「主体性」の育成につながっていると考えられる。

したがって、本研究では、『学び合い』に基づくベースボール型授業の実践に着目して、生徒の「主体性」の育成を意図した一連の授業の成果を実証していきたい。

* 広島大学大学院教育学研究科

2. 研究の目的

そこで本研究では、『学び合い』に基づくベースボール型体育授業の守備場面の活動に着目し、授業前後における生徒の主体性の変容を明らかにすることを目的とする。具体的には、(1) 守備場面に関する学習課題の達成度の変化と、(2) 生徒の自己評価の記述の変容、の2点から授業実践の検証を行うこととする。

3. 授業設計

(1) 単元計画

表1は、本授業実践の単元計画を示している。本単元は、中学校3年生(男女共習)を対象として、1時間目をレディネス調査、2時間目から4時間目を基本的技術を習得する授業とした。そして、5時間目から10時間までを『学び合い』の実践を適用した。

表1 ベースボール型ゲームの単元計画

体育科・保健体育科の醍醐味		①個人差(多面的価値観)が大きいことが一番の価値である。その中で主体的、協働的に学習を進めることができること。 ②一人も見捨てないことをあきらめない集団に育てることができること。										
ベースボール型の醍醐味		攻守のバランスの良いゲーム性の発展。「進塁」を契機とした攻守の戦術的課題がイタチごっこのように発展していくのが球技の醍醐味であると考え。そのゲーム性の発展の中で打つ楽しさやアウトを取る楽しさなどが味わえる。また、技能やルールの必然性にも気づくことができると考える。										
単元目標		・技術の名称、練習の方法、守備の役割分担、失点を防ぐための送球方法に関する知識テストで80%以上の得点をとることができる。【知識】 ・基本的な捕球動作から状況に応じた送球ができる。【技能】 ・「失点を防ぐために、ランナーと打球の状況を考えて適切な塁に送球する力」の自己評価と他者評価を適切に行うことができる。【思考力・判断力・表現力等】 ・フェアなプレイを大切にし、互いに助け合い教え合うことができる。【学びに向かう力、人間性等】										
時間	1校時	2校時	3校時	4校時	5校時	6校時	7校時	8校時	9校時	10校時	11校時	
導入	挨拶	準備 集合、挨拶									挨拶	
	課題の説明	キャッチボール					自主的に考えてウォーミングアップを行う					課題の説明
		学習課題										
	単元目標と計画を 理解することができる。	全員が正しい送球・捕球フォームを理解できるように助け合うことができる。	全員が正しいバットイングフォームを理解できるように助け合うことができる。	全員が練習の方法を理解できる。	全員が、失点を防ぐために、ランナーと打球の状況を考えて適切な塁に送球する力を身につけることができる。							全員が、自己評価と他者評価を適切に行うことができる。
展開	単元目標 単元計画 の説明	送球、捕球のポイント説明	バットイングのポイント説明	練習①説明	『学び合い』の実践							知識テスト
	知識テスト	キャッチボールの説明	トスパットイングの説明	練習①実施								アンケート
	アンケート	キャッチボール	トスパットイング	練習②説明								自己評価 他者評価
				練習②実施								
終末	生徒による振り返					生徒による振り返					生徒による振り返	
	教師による振り返					教師による振り返					教師による振り返	
評価	知識	○観察、プリント	○観察、プリント	○観察、プリント	○観察、プリント	○観察、プリント					○知識テスト	
	技能							○観察		○観察	○プリント	
	思考						○観察、プリント		○観察、プリント		○観察、プリント	
	人間性	○観察、プリント	○観察、プリント	○観察、プリント	○観察、プリント	○観察、プリント		○観察、プリント		○観察、プリント		

(2) 実際の授業(10時間目の事例)

日時 平成29年11月18日(土) 第2校時(11:05~11:55)

年組 3年1組 計38名(男子17名,女子21名)

本時の目標 失点を防ぐために、ランナーと打球の状況を考えて適切な塁に送球できる。

学習の展開

学習活動と内容	指導上の留意点(◆評価)
□学習カードで前回の成果と課題を確認する。	○目的を再確認させ、意欲を高めさせる。
失点を防ぐために、クラスの全員がランナーと打球の状況を考えて適切な塁に送球できる。	
□学習課題の全員達成に向けた練習を行う。	○学習課題に意識が向いていない生徒には、他の生徒に呼びかけるよう促す。

<input type="checkbox"/> 振り返りを行う。	<input type="radio"/> 効果的に課題解決に向けて行動している生徒に気づかせる。 <input checked="" type="radio"/> 課題達成に向けて工夫できたか(思考・判断) <input type="radio"/> 成果と課題を確認させる。
-----------------------------------	---

4. 研究の方法

(1) 学習課題の達成度についての調査

学習課題の達成度を把握するために、「課題達成度は何点ですか?」という問いで、単元の前(3時間目)と後(11時間目)に、生徒による自己評価(5件法)を実施した。評価規準は表2の通りで、この規準の妥当性は、西川(2017)を利用することで確保した。なお、本調査は、全授業に出席した36名の生徒を対象にした。

表2 守備で進塁を阻止する場面に関する評価規準

5…ランナーと打球の状況を自分で考え、適切な塁に送球できる。 4…ランナーと打球の状況をたまに指示してもらいながら、適切な塁に送球できる。 3…ランナーと打球の状況を常に指示してもらいながら、適切な塁に送球できる。 2…ランナーと打球の状況を常に指示してもらいが、適切な塁に投げられないことが多い。 1…ランナーと打球の状況を常に指示してもらいが、ほとんど適切な塁に投げられない。
--

(2) 「主体性」についての意識調査

「主体性」についての意識を把握するために、以下の2点の方法で調査を行った。第1に、クラス全体の「主体性」への意識を把握するため、表3のような調査を行った。

表3 主体性についての意識調査問題Ⅰ(1~10時間目)

1. 全員達成に向けての自分の貢献点 (5 4 3 2 1) 2. 全員達成に向けてのクラスの得点 (5 4 3 2 1) 3. 感想

具体的には、授業の終末5分間で、学習プリントの中に表3の質問項目を与えて記述させた。ただし、1時間目から4時間目については、「3. 感想」のみを記述させている。また、11時間目は、教室で授業を行い、表4のような質問項目を与えて記述させた。

表4 「主体性」についての意識調査問題Ⅱ(11時間目)

全員が課題を達成するために、よかったと思う <u>具体的なエピソード</u> や、 ダメだったと思う <u>具体的なエピソード</u> を書いてください。
--

第2に、「主体性」の育成において、顕著な変容が現れた生徒を事例的に取り上げた。抽出の方法としては、表3・表4のすべての記述の変容過程と、学習課題を達成する割合が低かった生徒で、運動に苦手意識を感じている生徒である。しかも抽出された生徒Kは、運動への苦手意識から、仲間の前で体を動かすことに対して消極的であった。したがって、そのような生徒Kに焦点をあててながら、どのように「主体性」についての意識が変容したのかを分析することとした。

5. 結果

(1) 学習課題の達成度について

図1は、単元前後の学習課題の達成度を示している。分析の結果、単元後には、自己評価が4以上に到達した生徒が33名(91.6%)に増加した。また、自己評価が3以下にとどまった生徒が3名(8.4%)いた。なお、生徒Kは、この3名に含まれていた。

学習課題の達成度

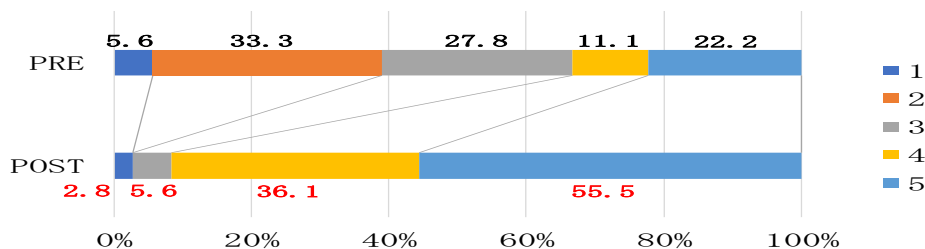


図 1. 単元前後の学習課題の達成度

(2) 主体性について

表 5 は, 生徒 K の単元における学習プリントの記述内容の変容過程を示している。単元の前半では, 自己の課題について気づくのみである。しかし, 単元の中盤から後半にかけて, 自己やチームの課題について積極的に解決しようと行動している様子が窺えた。

表 5 生徒 K の学習プリントの記述内容の変容

〔1 時間目〕	ルールやボールの投げ方などの技術面に関して, なにも知らないことが多すぎる。また, <u>野球ができる人との差が大きすぎる。ソフトボールを普段全くやっていないと, ほとんど何もできないのでおもしろくない。ソフトボールは自分がやるのではなく, 人がしているのを見るほうが楽しい。</u>
〔2 時間目〕	未記入
〔3 時間目〕	いろいろな指示をだしてくれた。どのような練習をするのかなどの指示を出してくれた。また, ルールを教えてくれた。
〔4 時間目〕	打者が打つ前に, どこで守ればいいのか指示してくれた。また, 守備する場所を決めてくれた。
〔5 時間目〕	<u>友達からもらったアドバイスを活かせるように努力している。わからないところは友達にきくようにした。しかし, アウトをとることはできなかった。試合の中でボールをとることができなかった。みんなが誰かにアドバイスをしたりアドバイスを求めたりして, 全員達成できるような雰囲気を作っているから。また, 練習時に各チームだけで判断するのではなく 1 組でまとまって判断しているから。</u>
〔6 時間目〕	<u>前回よりもチームリーダーに多くのアドバイスをききにいくことができた。また, 練習中, 球をとってベースの人に投げるのが初めてできた。次回をもっとスムーズに失点を防ぐための動きをするようにしたい。前回よりチームのリーダーがたくさんアドバイスをしてくれたのでスムーズに練習をすることができたと思う。また, 前回よりも発言が増えたり, 男女の差は小さくなったと思うけど, 無駄な時間があったと思う。</u>
〔7 時間目〕	今回, <u>チームの人から打撃についてのアドバイスをもらうことができた。また, あまりボールが来ない場所にいたら, チームの人がボールが来やすい位置でやらせてくれた。アドバイスをしたり, されたりする人が多かったのはいいことだと思う。しかし, 試合をやっている横で遊んでいた?人は自分のチームをしっかり見てアドバイスをしあげればよかった。</u>
〔8 時間目〕	<u>ボールをうまくキャッチする方法をいろいろな人に教えてもらうことができた。グローブが開いていないことに気付くことができなかったので本当にありがたいアドバイスだった。いろいろな人がアドバイスをしあっているし, 失敗しても特になにもないのはうれしい。また, 時間を決めたり, 効率の良い練習ができていていると思う。</u>
〔9 時間目〕	<u>人からアドバイスをたくさんもらっているけど, あまり向上していない気がする。打球をとることができないので, ボールをとる練習をもっとやりたい。みんな指示がでたらはやくその指示に従うことができていると思う。無駄な時間が少ないと思う。また, 試合中にアドバイスをしている人が多い。</u>
〔10 時間目〕	<u>今日はあんまり練習できなかったけれど, チームの人からアドバイスを少しもらうことができた。けれど, ボールをあまりとることができなかった。いつもと場所が違ったけれど, できるだけみんなが練習しやすいようにと考えてくれた人が多かった。また, 全員で練習したときの雰囲気がとてもよかった。</u>

〔11 時間目〕

自分が、どこに送球するかわからないときにチームリーダーがすぐに「〇〇に送って」とアドバイスをしてくれた。その後、塁に人がいないときは、1 塁に、2 塁にいるときは…などのアドバイスをしてくれた。また、自分がボールをうまくとれずにいたら「グローブをもう少し開いて」とか「腰をかがめて」などいろいろなアドバイスをチームリーダーがしてくれた。今日は具体的にどうやって練習するか、リーダーが中心となって考えてくれた。自分は、あまりボールをとったり、打ったりすることが簡単にはできなかったけれど、自分からアドバイスを求めようとは、あまりしなかった。たいてい、同じチームの人が「グローブはもう少し開いて」などと声をかけてくれるのを待っていた。自分がみんなからアドバイスや助言をもらうばかりで、自分は、他の人にあまり話しかけていけなかった。

(表中の 下線 : 課題への気づき, 波線 : 課題に向かって進んで取り組む姿)

6. 考察

(1) 学習課題の達成度について

ベースボール型の体育授業において、守備場面における学習成果を確認することは重要な要因である(岩田, 2011)。その点について、幸坂(2011)は、守りの魅力を主体的に探る学習展開から「ゲームを通じて関係プレーや中継プレーなど仲間と連携した守備のよさや重要性を認識した上で、基本技能の習得を図ろうとする子どもたちの姿が多く見られた」と報告している。『学び合い』に基づく本授業実践においても、生徒同士が対話をしながら、守備場面における技能を発揮する様子がみられたことから、幸坂(2011)と類似した傾向が得られた。

したがって、本実践では、「主体性」の育成を意図した『学び合い』の実践を通して、一定の守備場面に関わる技能の成果が得られたと考えられる。

(2) 「主体性」について(生徒Kに焦点をあてて)

周知の通り、体育は主体性の育成に最適な教科であり、運動集団を媒介にし、技術習熟や技能達成を目指しながら、努力や協力等の人格を陶冶する契機を内包した人間形成に欠くことのできない貴重な経験を提供できる場をもっている(白川ら, 2010)。

今回の実践を通して、生徒の「主体性」はどのように培われたのか。生徒の自由記述を分析した結果、生徒Kを事例から、「主体性」の育成に関して転機となる2つの場面を確認することができた。

1つ目は、6時間目にみられる「主体性」の転機である。表5における6時間目の記述から、5時間目の授業よりも積極的に仲間にアドバイスを求める様子が窺えた。また、実際の授業においても、仲間同士の学び合いの中で、生徒Kの捕球・送球する技能が向上する様子が見られた。しかも、7時限目には、打撃についての課題も言及している。石塚(2011)は、誰もが主体的に参加できるベースボール型の授業実践において、打者の傾向から守備側の主体的な対策が生まれることの重要性を指摘している。そのように考えると、守備を中心的な課題としつつも、打撃あつての守備であり、その両面の課題を往還する中で、守備の重要性を再認識していることが窺える。しかし一方で、アドバイスを求めに行く生徒は限定されており、一部の生徒同士のみ限定されているという様子も見受けられた。

2つ目は、8時間目にみられる「主体性」の転機である。表5における8時間目の記述から、ボールの捕球動作に磨きをかけようとする様子が見られた。具体的な授業場面において生徒Kは、「グローブが開いていない」と仲間からアドバイスを受けて以降、さらに前向きに取り組もうとする様子が見られた。しかも、11時間目の記述になると「グローブが開いていない」という仲間からのアドバイスに言及していることから、生徒Kの分岐点となった場面であると解釈することができる。

しかしながら、表5における9時間目の記述にあるように、仲間からのアドバイスが捕球技能の向上にあまり役立っていないことに気づいている。そして、基本練習に取り組みたいという思いを抱くが、それを友達に伝えることに躊躇する様子が窺えた。さらに、実際の授業での生徒Kは、アドバイスを聞くことに徹し、実戦形式の練習を行い続け、グループの仲間に基本練習に取り組みたい思いを伝えることはできなかった。

7. 結論

成果としては、生徒たちの一定の守備場面に関わる技能の成果が得られたことである。また、焦点をあてた生徒Kを分析することで、守備場面の活動における「主体性」の転機にかかわる記述を確認できた。

柿手祝彦・濱本想子・岩田昌太郎(2018),「ベースボール型体育授業における「主体性」の育成を意図した実証研究
—『学び合い』に基づく守備場面の活動に着目して—」, 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育第 49 集」, 47—52.

一方, 課題としては, 運動を苦手としている生徒の「主体性」を向上させる手立てを開発することである。西川(2014)は, 仲間の力を借りる能力の大切さを述べている。本実践では, 「できないから教えて」と積極的に質問できる雰囲気づくりが必要であったと考える。具体的には, 生徒 K が練習中に球をとってベースの人に投げることが初めてできた成功体験の活用などの励ましを教師が汲み取り, それをグループやクラス全体にフィードバックするような指導も必要であった。

〔註記〕

本稿は, 広島大学学部・附属学校共同研究プロジェクト(平成 29~30 年度: 整理番号 83-01)の助成を受けている研究の一部である。

〔引用・参考文献〕

- 立木正(2011):「ベースボール型ゲーム」の今までとこれから. 体育科教育, 59(5): 9.
- 岩田昌太郎(2017)「投」が追加される陸上運動をどう展望するか—「THROW」の視点から—. 体育科教育, 65(7): 40-43.
- 岩田靖(2011): ベースボール型ゲームの教材の系統性を探る. 体育科教育, 59(5): 10-14.
- 竹内隆司・岩田靖(2006): 小学校体育における守備・走塁型ゲームの教材づくりとその検討—特に, 守備側の戦術的課題を誇張する視点から—. 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要(7): 81-90.
- 南島永衣子(2010): ベースボール型ゲームの教材づくり. 新版体育科教育学入門: pp. 210-218.
- 西川純(2010): クラスが元気になる! 『学び合い』スタートブック, 明治図書.
- 西川純(2014): 気になる子への言葉がけ入門(THE 教師力ハンドブック), 明治図書.
- 三崎隆(2010): 『学び合い』入門これで, 分からない子が誰もいなくなる!. 大学教育出版.
- 西川純(2017): アクティブ・ラーニングの評価がわかる!. 学陽書房.
- 幸坂浩(2011): 相手に得点させないことを核にした球技の楽しさを探るベースボール型授業の開発, 福井大学教育実践研究(35), 191-196.
- 白川由貴・友添秀則・吉永武史(2010): 学校体育における「主体性」の育成に関する一考察, 日本体育学会大会予稿集 61(0), 259.
- 石塚諭(2011): 誰もが主体的に参加できるベースボール型ゲームの実践を考える, 体育科教育 59(5), 26-29.